

2019年1月

音が人に与える影響とその認知度

経営学部 経営学科 森ゼミ
B5R11062 小峰啓輔

【卒業論文概要】

人は生まれながらに音を聞いている。数々の音を聞きながら生活し、自然界に完全な無音という状態はないといわれている。音に囲まれた生活の中で、私たちは様々な音を聞き分けている。音は連なることで音楽になり人の感情を動かし、雑音になり時には騒音問題に発展する。そのため、人に影響を与える音に触れて認知することは非常に重要である。

本論文の目的は、文教大学に通う学生に中から約 100 名を母集団とし、統計処理を用いて音が人にどのような影響を与えるか、また音をどれだけの人間が認知しているのかを明らかにすることにある。

まず、音に関する文献を読むことで、音に対する知識と心理的な影響を知ることから始めた。その内容から、「音の影響を理解することによって、生活を豊かにできる」という仮説を立てた。そして、「音に対する認知度」「音の生理的影響」「音の認知的影響」「音の行動的影響」「普段の生活に対する幸福感」の 5 項目で 16 問のアンケートを作成。アンケート調査を行った。そのデータをもとに、ピポットテーブルや統計ソフトである R の因子分析を用いて分析した。その結果、予測では認知度は低いとされていたが、予測以上に認知度は高いという結果となった。そのほかの項目ごとの予測はおおむね予想通りであったが、この認知度との関連性を調べると興味深い結果が出た。参考文献から得た「人間は波の音を心地よいと感じる」という記述があったため、波の音は心地よいかという質問を行ったところ約 65% が心地よいと感じていることが分かった。その結果と認知度の質問結果をピポットテーブルを用いて比較したところ、認知度が高いと心地よいと感じるが、認知度が低いと心地よく感じない傾向にあることが数字として表れた。このほかにも、音に対する認知度は幸福感などにも影響を与えていることが明らかとなった。今後、音をより認知し、その効果を理解することでより生活を豊かにできるのではないかという課題を提案した。